

このコーナーでは、この地域に伝わる民話を紹介し、皆さんからの感想画を募集しています。紹介する民話は、子どもたちに、ふるさとの伝説や昔話を教え、遠い祖先の心や、郷里のぬくもりを少しでも感じてほしいと、松浦市教育委員会が平成4年に再編した「松浦の民話」という本から引用した話です。

弘安四年（1281年）正月、元のフビライ汗（ハン）は、再び、日本遠征の号令を下しました。

先の文永の役では、十月に日本へおしよせたために、冬の季節風が吹き出す前に引き返さなければならなかったため、今度は海のおだやかな五月から六月にかけてせめること、

松浦の民話⑱

元寇

— 弘安の役 —

ていました。

博多湾では、直ちに激しい戦いが起こりました。日本側の固い守りに手こずった元軍は、松浦地方の鷹島付近の海上で船を止め、まだ到着していない、十萬の江南軍を待つことにしたのでした。

「どうだ上陸するような動きはあるか。」

「いや、いつか来る気配はないぞ。ただ、何かを待っているようだ。」

元の軍船九百せきは、広い伊万里湾をうずめて、静かに停はくしていきます。

にしました。

まず、高麗・蒙古・漢の連合した四方の東路軍は、九百せきの軍船で、対馬から吉岐を襲い、六月六日には博多湾にせめよせて来ました。（鎌倉幕府は、先の文永の役のことから、元軍はもう一度必ずせめて来るにちがいないと予想し、防壁をきずいへ

それに対するかのように、海岸から急にせり上がった山の中腹には、旗指物がいく百、いく千となくひるがえっています。伊万里湾をとり囲む山々には、この地方の松浦党の武士をはじめ、九州各地からかけつけて来た鎌倉御家人たちが、郎党を引き連れて陣をかまえていました。城山にも石壁をきずきました。

元軍は、これは手ごわいと思ったのでしようか、しばらく停はくしていましたが、再び吉岐に上陸し始めました。打ち合わせた期日より大はばにおくれた江南軍を待ちわびて

いる兵士たちを、吉岐の島で休めるつもりだったのでしよう。

「敵は船の長旅と、この暑さに参っているにちがいない。本隊が合流する前に戦おう。」

と、総大将の肥前国守護、少弐経資は考えました。そこで、直ちに吉岐へわたり、こうげきをしかけることになりました。経資は、父の資能と十九さいになる息子の資時を先頭に、六月二十八日の夜、星明りを頼りに、呼子から吉岐へおしわたりました。この時の戦いはたいへんはげしく、経資と資能は負傷し、資時は戦死するほどでした。

この吉岐での戦いの後、待ちに待った十萬の江南軍がやって来たので、東路軍は船に乗り平戸方面へ向かいました。三千五百せきに分乗した江南軍は、まず五島列島を襲い、平戸島をあらしました。戦いにつかれた東路軍と、元氣いっぱいの江南軍は、平戸島の沖で合流すると、やがて再び鷹島付近へやって来しました。いよいよ博多湾めがけて総こうげきです。鷹島の周りの海は、元の軍船でふくれあがっています。

「おう、山代どの。これだけの元軍が襲いかかって来たら、防げるかのう。」

と、志佐小次郎祝は、山代栄に話し

かけました。

「吉岐では、わしらがしかけた戦いであったし、向うはつかれてた。それでも戦いは五分五分。御ぞうしの資時どのはうち死になさるし、生き残った者も、手きずのない者はいなかった。」

「そつだ、幕府は何を考えているのだ。関東からは安達盛宗どのが参陣なされているが、それもわずかではないか。この鎮西の地に所領のある御家人だけの力では、とうてい、防ぎきれぬものではない。」

山代栄は、左肩に受けた矢きずの痛みをこらえながら、幕府ののんきさに腹を立てていました。目の下に広がる元の軍船は数千せき。これまでの戦いはほんの序の口です。

それなのにどうでしょう。自分と肩をならべてひかえている松浦党の人々は、みな身内の人を殺され、つかれはて、きずついていました。もうすぐ巨大な元の船団は、博多湾めがけて動き出すでしょう。九州の中心大宰府がせめ落とされるのは、時間の問題のように思われました。

（次号「元寇-神風がふく-」に続く）

中世の松浦 (34) 鷹島海底遺跡

鷹島海底遺跡から見つかっている椀は、椀身の中央部付近に2カ所の穴が空けられています。この穴は碓石の幅に合わせであり、穴には樹皮を残したままの棒状の木材(椀擔)が貫通しています。分離型碓石はこの2本の椀擔で挟まれたうえ竹製の縄(竹索)で縛って固定されています。4号椀の碓石には表・裏面の3カ所に彫りこんだ縦溝があることから少なくとも3カ所以上で緊縛されていたと思われます。

写真は4号碓石で、左の碓石は長さ52センチ、椀身側の幅19センチ、椀先の側の幅17センチ、厚みは11センチで、重量は20・35キログラムです。右の碓石は長さ52・5センチ、椀身側の幅19センチ、椀先の側の幅13センチ、厚みは10センチで、重量は17・75キログラムです。両碓石ともほぼ左右対称で同形状を呈しています。碓石の石材は石灰岩で、椀擔には広葉樹が使用されています。

4号椀の椀身には一辺が17センチの角材を用い、先端から210センチが残っていました。先端には海底でのかかりの役割を果たす椀齒が長さ171センチほど完全に残っていました。

一方の椀齒はフナクイムシの侵食などによって欠損していました。この椀は3号椀の大型戦艦用ではなく小型の上陸用舟艇の椀に使用されていた可能性があります。



▲ 4号碓石

松浦の民話イラスト

読者の皆さんから寄せられたイラストの審査結果を以下の通りお知らせします。

先月の民話「丹後の人柱」のイラストに、2通の応募がありました。ご応募ありがとうございました。



【最優秀賞】花屋千里さん (志佐・辻ノ尾、52)

「人柱に立った父の死を悲しんで口をきかなくなった娘さんが鳴いていたきじが撃たれたのを見て、突然『口故に父は丹後の人柱 きじも鳴かずばうたれまじきに』と歌った場面を、色彩豊かに仕上げてありますね」(はま)



【優秀賞】前田サツキさん (福島町・日の浦、71)

「自分が人柱になることを決意している田代近松さんの表情が印象的な作品です。人柱になる決め手となる袴の横ぶせもしっかり描いてありますね」(はま)

■ あなたの力作を募集!

— 民話の感想画募集 —

右の民話を読んで感じた情景をイラストにして、必要事項を記入の上左記まで持参、郵送またはメールにて送付してください。応募いただいたイラストは審査をし、上位のものを次の市報で紹介いたします。

【応募資格】住所、年齢、性別など何も問いません。ごなたでも応募できます。

【イラストの規格】はがきまたはA4サイズ以内の紙に絵の具やクレパスなどで書いたカラーのもの(色鉛筆の場合は濃く塗ってください)。

【必要事項】住所、氏名(ふりがな)、電話番号、年齢、職業(学校名)

※掲載する場合、ペンネームを希望する人は、ペンネームもご記入ください。

※はがきで応募される人は、必要事項を表の下部に記載してください。

なお、いただいた個人情報(民話コーナー以外)には使用しません。

【応募締切】9月12日(月)必着

【応募・問合せ先】

〒859-4598 松浦市志佐町里免3665番地

松浦市まちづくり推進課 秘書広報係

☎065672-1111 Eメール=hisyo@city.matsura.lg.jp

※福島支所、鷹島支所、そのほかの各支所でも受け付けています。